

第1ヒートは攻めすぎてスピンの終わったものの、第2ヒートも攻めの姿勢を崩さなかった橋本克紀選手が、2016年以来となる久々の全日本優勝を飾った。



SA1 橋本克紀選手、雨の筑波で3年ぶりの2勝目!

筑

波サーキットコース1000で開幕したJAF全日本ジムカーナ選手権。今シーズンも全10戦が踏襲され、まだ冬のような寒空に見舞われた開幕戦には、選手権クラス115台に、選手権対象外の「フォーミュラD」クラス、「箱D」クラスを合計して121名の参加者が集結した。

しかし、決勝日は朝から冷たい雨に見舞われてしまう。結局、その弱い雨は終日降り続いたため「1本目勝負」が危ぶまれたが、第2ヒートでも自己タイムを更新することが可能だったため、各クラスで第2ヒートの逆転劇が見られた。

コースレイアウトは筑波コース1000の順走

レイアウトを使いながら、コース上の各所に1本パイロンのターンや、フィニッシュ前には速度抑制のスラロームが設置された。

しかし、コースなりに走る区間がハイスピードであるため、ウェット路面ということもあり、ターン直前では高度なブレーキングスキルが要求される難しいコース設定となった。

SA1は往年の名車を駆るベテランと若手がしのぎを削る図式は変わらない。しかも、昨年までPN2で戦っていた若手期待の坂中真一郎選手や、SCで戦っていた山越義昌選手らがCR-Xに乗り換えるなど、なぜかEF8が増殖。

ウェット路面の第1ヒートも、EF8 CR-X勢

が1分23秒台で上位を占め、近藤岳士選手が1分23秒325で暫定トップに立っていた。

第2ヒートも雨は降り続いたものの、PN4までは自己ベスト更新が相次いだ。しかし、SA1ではタイムの上がり幅が少ない状況だった。

しかも近藤選手の第2ヒートはパイロンのペナルティに終わってしまう。続いて1分23秒台の入賞圏内に入ってきたのは鈴鹿サーキットマイスターの安木美徳選手だったが、EK9シビックを駆る関東の橋本克紀選手が1分23秒224でベストタイム更新。続く後半ゼッケン勢は小武拓矢選手の1分23秒541が精一杯ということで、橋本選手が逃げ切って開幕戦優勝を飾った。

SA1 / 1. 第2ヒートは10秒のペナルティで沈んだ近藤岳士選手。第1ヒートのタイムで2位に。2. 小武拓矢選手は2本とも1分23秒台の走りをしながら3位に留まった。3. 昨年の最終戦・鈴鹿南ウィナーの安木美徳選手が4位。4. 5位は一色健太郎選手。5. 6位は山越義昌選手。PN1 / 6. SA3からPN1に移行してきたチャンピオン小浜洋平選手。緒戦でいきなりブツぎりの優勝を果たした。「ドライの公開練習も、決勝のウェット路面でも、タイムは出たんですけど内容が良くなくて……。クルマもドライバーも、まだまだ上げ幅はありますよ」と、勝って兜の緒を締める。7. 2位は福田大輔選手。8. 3位は深川敬暢選手。



「1本目は調子に乗ってスピニングしてしまいました(笑)。今回はクルマのリアの限界を高めにしてきたので、頑張り過ぎちゃったんですね。2本目は大きなミスはなかったんですが、PNクラスの走りを見ていたら、グリップ感が上がっている印象だったので、出走前にリアの限界を下げたんです。実際に走ってみたら2本目の方が全然グリップしたので、その変更が当たった

感じですね。でも、2本目は(ペナルティに沈んだ)近藤(岳士)さんの“生タイム”を抜けなかったのが心残りですね」とは橋本選手。

CR-X勢の台頭をコンマ差で抑えた橋本選手。自身2勝目となる2016年以降の優勝を飾り、EK9シビック使いとしての存在感を示した。

PN1は、SA3から移行した小(呉)洋平選手がいきなりの優勝。PN2は山野哲也&直也兄弟が

ワンツーフィニッシュ。PN3は西野洋平選手が驚愕のベストタイムで優勝し、PN4は茅野成樹選手が大会オーバーオールタイムで優勝した。

SA2はチャンピオンの高江淳選手が、雨の鈴鹿南のトラウマを克服して逆転勝利。SA3は西森顕選手が第1ヒートで逃げ切って優勝。SA4は津川信次選手、SCは伊藤和浩選手とダブルエントリーした野尻隆司選手が優勝した。



PN2 / 9. 山野哲也選手(右)は新しいタイヤの雨のデータがなかったので、2本目は思い切って空気圧を上げるセットアップを試してみたんだ。その結果、ソリッド感が増えてオンザレールな走りができたと、第2ヒートで2秒以上更新して優勝。10. ダブルエントリーの山野直也選手は124スパイダー本番初体験で2位。11. ベテラン稲木亨選手が3位。PN3 / 12.「山野さんとユウ選手のプレーキングが凄いいい話を聞いて、自分も攻めました。2本目は自分でも怖いくらいの走りでしたが、タイヤも付いて来てくれたのでいいタイムが出ました」と語る西野洋平選手が筑波2連勝。13. 約コンマ4秒屈かかなかったユウ選手が2位。14. BRZの青木康治選手が殊勲賞の3位表彰台。



PN4 / 15. PN4表彰台。昨年はワンツーだった野島孝宏&野島美恵夫妻が2位と3位。全日本デビュー戦の19歳・奥井優介選手が4位。16. 優勝の茅野成樹選手は「2本目のグリップ感は良かったので、ほぼ完璧な走りができました。最後のスラローム進入でどれだけブレーキを我慢できるかがキモでしたね」と振り返る。17. 野島夫妻はダブルエントリー。SA2 / 18. 昨年はタイトル争いを演じた佐藤巧選手が2位。19. SA2に移った若林拳人選手が3位。20. 優勝の高江淳選手は「1本目は前走の朝山崇選手のスピニングを見て、昨年の最終戦鈴鹿南を思い出して抑えすぎました。2本目は1コーナーでドライと同じ感覚で走れるなと思って攻めました」と笑顔。SA4 / 21. SA4表彰台。第2ヒートでオーバーオールに届かなかった津川信次選手は「いい走りができただけ。2本目は雨量が多かった」と悔しい優勝。22. 昨年の東北チャンピオン高瀬昌史選手が2位。23. 3位は飯坂忠司選手。



SA3 / 24. 第2ヒートはタイムダウンに終わった西森顕選手だが、第1ヒートのタイムで優勝。「1コーナー先のコース外でターンする所が今回のキモだと思ってましたが、2本目はそこで落とし過ぎちゃいましたね」と反省しつつバルクフェルメで愛車を労った。25. 久保真吾選手が難しいマシンを2位に導いた。26. 3位は渡辺公選手。SC / 27. 伊藤和浩選手とダブルエントリーで挑んだ野尻隆司選手が、クラス唯一の1分19秒台で優勝。「今年はタイヤサイズを拡大したんですが、雨の仕様を試せてなかったのが、今回の路面は正直怖かったですね。探りながら何とか帰れた感じだ」と安堵の表情。28. 2位は大橋渡選手。29. 車両をリニューアルした高橋和浩選手が3位。